道しるべであり，人生航路の羅針盤でもある……。

『社会学評論』への挑戦

関先生の指導の方針は，「日大はある面で人間関係で微妙な部分があって難しいところのようだけれど，研究者として自立するには，内輪で評価される事を第一に考えてはいけない。外で評価される研究成果をまとめ上げることの方がはるかに重要だ。だから内に向かう関心を外に向けてしっかり研究するように」，ということでした。そして，先生は，「日本の社会学界で一番権威があり，若手の登竜門にもなっている日本社会学会の学会誌『社会学評論』に論文を発表すること」を，課題として示されたんです。

これは正直に言って，荷が重かった。日本の社会学系学術誌の中でおそらく一番最初にレフェリー制を敷き，当時，投稿された論文が２人の匿名レフェリーの審査を何回か経て，１年数ヶ月かかってようやく掲載されるというのが平均的だったんです。とてもぼくにはそんなことできないと最初は思ったのですが，「修士論文の一部をもっと詳細に展開したら良い。内容的な面で言えば論文（上限50枚）ではなく研究ノート（上限30枚）としてもいいかもしれない」，という先生のサゼッションを得て俄然やる気になったんです。で，投稿して，何回かの書きかえの末，ドクターの３年が終わる頃に『社会学評論』に載ったんです*13。学内誌に何本か論文を発表してはいたけれど，自分ではこれが学会デビューを果たした処女論文と考えています。

*13 後藤範章「我が国研究者における『地域社会』理解と『地域社会学』的分析の二視角」（日本社会学会編『社会学評論』第35巻第４号，有斐閣，1985年３月）

就職浪人

その後そのまま大学に残られたんですか？

いえ，そうではないんです。大学院在学中は，就職というものを意識していなかったんです。まぁ何とかなるかなと思いながら，何ともならなかったんですね。１年間のブランクがあるんです。大学院時代からやっていた私立の女子高校・中学の非常勤講師（楽しかった！）や学習塾の講師などしながら食いつないだんですが，この年も素晴らしい人たちとの出会いや経験があった。話し始めると長くなるから，はしょりましょうね。ほんとは，1983年と85年に生まれた子どものことなども話したいんだけれど……。

それで，年が明けた1986年になって，正式なオファーが二つあったんです。一つはここに残らないかという話なんですが，助手のポストが埋まっているので副手でよければ採用したい，ということだったんですね。これには即，「お願いします」と答えました。その数日後，今度は地方のある国立大学から研究助手として迎えたいという話をもらったんです。『社会学評論』に掲載せれた研究ノートを評価してくれて，ぜひ来てほしい，と。でも，先の話の後でしたので，その場で断ってしまったんです。

母校への就職

その時はこのことをあまり重く受け止めなかったんですが，関先生に報告したら怒られたんです。「何で即答してしまうんだ。何でそんな大切なことを相談しなかったんだ」と。「学界で通用する研究者として歩んでいく気なら，母校に残るのは必ずしも良いとは言えない。しかも日大が副手のポストで，他大学が助手としてというのならなおさら外に出た方が良かったのではないか」，とも言われたんですね。確かにそうかも知れない，と感じました。でももう後の祭りで，結局残ることになったわけです。

日大生を育てるということ

それで，その際に改めて考えたんです。自分は日大に残って，何をやりたいのか，何ができるのか，何をやるべきなのか，と。で，思った。ぼくは，母校である日大のことが嫌いなんだけれど，好きなんです。愛憎相半ばするアンビヴァレントな心情なんですね……。

そうしたぼくの眼で現状分析して総合的な評価を下すと，今（その当時）の日大は学生にとっても教職員にとっても卒業生にとっても誇りを持てるような現状ではない。世間の評価もそれほど上がっているとは思えない。問題・課題が多すぎる。輝くような魅力が乏しい。とすれば，誇るに値する日大になるよう「改革」していくしかない。しかし自分には大きなことはできない。自分ができることは，日大を職場とする日大の卒業生として，後輩でもある学生たちの才能や可能性の芽を最大限に伸ばしてあげられるような教育活動を，地道に重ねていくこと。つまり，日大生を育てることこそが第一の使命なんだろうと思ったんです。

学生は管理の対象じゃない。潜在的か顕在的かはともかく，可能性に満ちあふれた個性的な人間として（個性のない人間はいない！），一人一人の学生を捉えることが大切なんだと思う。

写真で語る：「東京」の社会学

*14 「東京人」観察学会（社会学科・後藤ゼミ）によって，文理学部の桜麗祭で毎年30～35点の作品が展示発表され，作品数は，1994年度～1999年度の6年間で合計185点に上っている。それらは全て，インターネット上でも公開されている。URL http://www.chs.nihon-u.ac.jp/soc_dpt/ngotoh/tokyo.html

今進めている“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクト*14も，そうした考えが反映されているのですか？

はい，学生の教育・実習用のプログラムとして発想し，開発・実践したものです。これは，「東京らしさ」や「東京人らしさ」を視覚的に捉えて（写真に収めて）データ化し，これを素材に「東京」と「東京人」を社会学的に分析してみる，というものです。まず，日大や他大学でぼくの「地域社会学」などを受講する学生個々人が，そうした作業を行ってレポートを提出します。それらを「東京」の多元的なリアリティが刻印された質的な集合データと見なして，今度は，ゼミでセレクトした作品群を集団（集合）的に読み直して，新たに作品化していきます。

1994年度から始め，早いもので6年間が経過しました。今でこそ調査・研究用プログラムとしての側面も持つようになっているけれど，当初は，学生に社会的リアリティを体感してもらって，社会現象への興味・関心を高め（センス・オブ・ワンダーを磨いて），「社会学する」ことを実践するための方法論として構想したんです。現実の細部の中に宿っている意味や意図をくみ取り，そこからソシオロジカル・イマジネーション（社会学的想像力）を働かせて「社会」を再構成していく道筋を，学生たちが肌身を通して感得できるプログラムとして，ね。

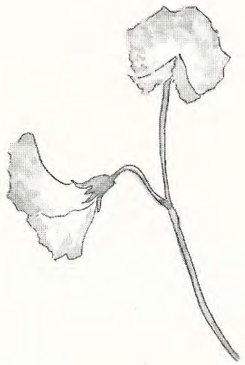
1999年9月のゼミ合宿（山中湖セミナーハウス）にて

試行錯誤の果てに

ただ，そこに至るまでには長い前史があるんです。副手から助手，そして専任講師になり，文理で授業を担当するようになった1991年度から何年間か悶々としてたんです。自分でこういう教育をしたいと思いつつも学生に伝わらない，試みることがうまく行かなくて，一人でから回りしていたのね。学生が今の世の中の動き，現実社会との接点を切り結んで，生き生きと研究活動に取り組めるようになるには，教師として何をしたらいいのかずっと思い悩んでいたんです。詳しいことは省略しますが，試行錯誤の果てにたどり着いたのがこのプロジェクトだったんですね。

桜麗祭で

桜麗祭では，今年も千人以上の方々がアンケートに答えてくれましたね。



そうですね。会場の教室まで足を運び，展示作品を丹念に見て，作品への投票を兼ねたアンケート用紙に記入してくれる方々が，毎年こんなに沢山もおられることはほんとに励みになりますね。でも，最初の年（1994年度）は3日間で500人足らずでした。その後は，95年度が700，96年度が800，97年度から千人以上となって現在に至っているわけですが（最高は1997年度の1,340名），これは桜麗祭が多くの人々を集める学部祭として成長していることが反映しているのだろうと思います。桜麗祭がスタートした1993年度と今とを比較すると，イベントとしての充実度，にぎわいや華やかさなど，どれをとっても隔世の感がしますね。

ただ，その一方で，ずっと関わり続けている者の眼には，運営が硬直化，形式化しつつあるようにも感じていて，その点がやや気がかりです。祭りというのは洋の東西を問わず，日常の秩序を打ち壊して再生させるところにこそ深意があると考えますし……。

情熱の源は

前に「自分たちはシラケ世代だ」と言われましたが，先生は情熱を持って取り組んでおられるように見えます。何がそのようにかきたてるのですか？

やはりある種の希望なんでしょうね。ぼくの働きかけを受け止めてくれ

る学生たちがここにはいますし，文理学部も昔と比較すれば格段に良くなってきた。希望や期待をつないでくれるものを実感できることが，ぼくにとっての大きなエネルギーになってるのかもしれません。

それから，やはり先ほど述べた母校に対する愛憎半ばする複雑な思いでしょうね。現状に対する不満は沢山あるけれど，「犬の遠吠え」（外在的な批判）をし続けてるだけでは何も変わりませんので，ぼくは，内在的に批判して改善に向けて努力する（有言実行）というスタンスを取っています。

でも，いろいろ努力しても成果が反映されなかったり，希望の灯が消えてしまったらどうなるのか，という思いは絶えずついて回りますね。そう考えている教員はきっと多いんじゃないかなぁ……。

世紀転換点はイギリスで

> 今度はこれからのことについておうかがいします。先生は１年間イギリスへ行かれるそうですが，イギリスではどのようなことをされるのでしょうか？

日大の海外派遣研究員として，2000年３月末から2001年３月末まで，家族と共にイギリスへ行って在外研究にあたることになりました。掲げている研究のテーマは，「世紀転換点におけるヨーロッパ大都市の比較都市社会学的研究― Urbanity の Globalization と Localization ―」というものなんですが，これをゼミのプロジェクトで磨きあげ，新しい都市社会調査法と位置づけている「集合的写真観察法」*15によって行おうと考えています。

*15 後藤範章「集合的写真観察法―都市社会調査の新地平―」（『社会学論叢』137号，2000年３月）

サリー大学社会調査研究所

東京駅を基点にすると神奈川県の厚木あたりの位置になりますが，ロンドン中心部から南西約40キロのところにギルフォード（Guildford）という小さな都市があります。そこにあるサリー大学（Univ. of Surrey）社会学科の社会調査研究所に客員研究員として受け入れてもらいます。

その研究所では，質的な調査データをコンピュータを使って分析するという大変面白いことをやっていて，「集合的写真観察法」を都市社会調査の方法として確立させるには，最もふさわしい研究機関であると思ったのです。アプライ（受け入れの要請）をする時，知り合いもいないしつてもなかったのでどうなるか心配でしたが，意外なほどあっさり引き受けてもらえました。ゼミで行っているプロジェクトのことをかなり詳しく説明したのが良かったのかも知れません。

ユーロスターと三都物語

それから，もう一つ，「ユーロトンネル開通に伴うイギリスとヨーロッパ大陸との“実質的地続き化”の社会学的効果に関する研究」というテーマも構想しています。ユーロトンネルがドーバー海峡の地底を通っていて，ユーロスターが走ってますでしょ。あれって，イギリスをヨーロッパ大陸と実質的に地続き状態にしてしまうことを意味するんですね。で，ぼくは鉄道交通に絡んだ社会学的インパクト研究もやっていますので，この点にも関心があるんです。

第一のテーマとつなげて言うと，特にユーロスターで直接結ばれているロンドン，パリ，ブリュッセルという三つの大都市をフィールドに，「世紀末現象」と「新世紀現象」を写真にばしばし収めて，実証データと突き合わせながら分析・解釈していく。そしてその中から都市性を抽出して，「東京」と比較してみる。まあ，言ってみれば，“写真で語る：東京・ロンドン・パリ・ブリュッセルの比較社会学”，ってとこかな。

10年は続けたい

> ということは，イギリスから帰国されてからもプロジェクトは続けて行かれるのですね？

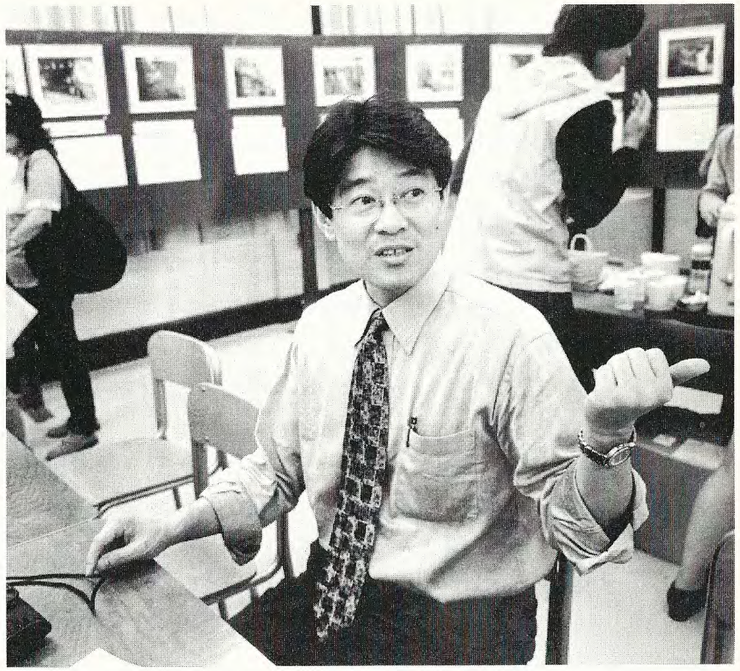
続けたいとは思っていますが，ただこれは体力勝負の部分が結構あって，正直なところ，もうかなりしんどいんです。精神的にも肉体的にも相当タフでないとできない。だから50歳を過ぎても60歳になっても続けられるかというと，多分無理だと思ってます。だけど，中途半端なところで止めてしまうのも惜しい。ゼミの卒業生とも，成果をきちんと形にして残すことを約束しているし。当面は，10年間を目標にやっていこうと考えています。

世紀転換期の，世紀末と新世紀を共に含んだ10年間の，「東京」の社会変容を社会学的に解き明かす。少なくてもその素材となる作品集を，ゼミの卒業生，現役生とぼくとで力を出し合ってまとめて，出版するところまでは是が非でも持っていきたい。それも狭い社会学の世界ではなく，広く市民社会に向けて発表し，“日大”印の成果として世に問うてみたい，と切望しています。

励ましの声

これまでも，実は随分といろんなところでこの試みについて話をして*16，

*16 社会学や民俗学系の学会や研究会，国や自治体や民間団体の研修会，講演会，談話会など。



1999年度桜麗祭での展示発表会場にて　　© 柿沼　隆

狭い世界での評価は得ているのですが，今年全国紙で大きく紹介*17されてからは，このプロジェクトを介しての交流の輪がぐっと広がったんですね。大新聞の社会的な影響力の大きさを改めて知ったわけですが，その一つにプロの写真家・柿沼隆さんとの交流があげられます。

*17　1999年1月29日付「読売新聞」朝刊・生活面の記事「写真が語る『現代の風景』―生活の変化映し出す」

柿沼さんの写真展の案内をいただいて，ゼミ生もぼくも，1999年4月に銀座で開かれた「TOKYO 世紀末展 Part 1」を見たんです（その後，全国各地を巡回）。写真作品の一点一点が見る者を差し貫く迫真力や物語の構成力を持っていて，同じ「東京」をモチーフとしていながら，ぼくらの写真とは天と地ほどの違いがあるんですね。

その柿沼さんが，今年の桜麗祭での展示発表を見に来られて，その後お手紙を下さったんです。そこには，「写真が弱いのが残念ですが，学生さん達が熱心になってこれだけ多様な『東京写真』を取ってくるのは大変なことです。文章にも面白みを多々感じました。これは10年ぐらい続けたら重要な意味を持つすごい記録になると思います」，とありました。

こうした励ましを力に変えて，良い成果をゼミ生や卒業生たちと一緒に作りあげていくつもりです。

人間は死ぬまで変わっていく

最後に，学生へのメッセージを一言お願いします。

そうですね。やはり，社会学的な人間観かな。

「三つ子の魂百まで」ということわざがありますね。幼い頃に形成された性格は，老人になっても変わらない，という意味です。多くの人に信じられているのでしょうが，社会学ではそうは考えない。社会化論や準拠集団論を持ち出すまでもなく，社会学は人間を死ぬまで変わり得る存在と捉える。もっと積極的に言えば，変えようと思えばいくらでも変えられる……。

「自分の性格が大嫌い」「自分には能力がない」などと悩んでいる人も少なくないでしょうが，「でもこればかりは変えられないから，どうしようもない」と諦めてしまっていませんか。しかし，そんなことは決してないんです。変えようと努力すれば，いくらでも変えられるんです。大切なことは，「夢と希望の力」を信じて，変える努力をすること。

社会を知る（社会学を学ぶ）ということは，社会や自分のイヤなところを変えていく（変革していく）ことにつながっていくんです。ぼくは，日本社会も，日大も，そして私たち一人一人も，変わっていく（変えられる）はずだ，と信じて疑いません。

未来は，私たちに等しく開かれているのです。

1999年12月3日（インタビューの日），研究室にて

学叢　第65号

平成12年３月20日　印刷
平成12年３月25日　発行　　【非売品】

発行者　日本大学文理学部
代表者　島　方　洸　一

印刷者　有限会社　文成印刷
代表者　林　　信　行

発行所　日本大学文理学部
東京都世田谷区桜上水3―25―40
電　話　03―3329―1151(代表)